

震災の被害を克服し、全国トップの集客を誇るまでに成長した、 芦屋市 B&G 海洋センター

平成 7 年に起きた阪神淡路大震災によって、芦屋海浜公園のプールは壊滅的な被害を受けましたが、平成 10 年、B&G 海洋センターを併設して新たにスタート。スタッフ総出で市内にチラシを配布するなど懸命の努力によって、5 年後の平成 14 年にはオープン当初に比べ、実に年間 1 万人以上も利用者数をアップ。平成 15 年度上半期においては、全国の B&G 海洋センターのなかで、プール利用者数全国 1 位を達成しました。今回は、同海洋センターにおける 6 年間の軌跡を追いながら、集客の秘訣を探ってみました。



芦屋市教育委員会
寺本三恵子係長



阪神淡路大震災後、芦屋海浜公園プールは B & G 海洋センターとして生まれ変わりました

スタッフの大きな自負

「これ以上仕事を増やせば、満足に休日も取れなくなってしまうよって、いつも言うのですが、スタッフたちは新しい教室など仕事の企画を次々に発案してくれますので、本当に頭が下がります」

芦屋市 B&G 海洋センターを訪れると、施設を運営する芦屋市教育委員会の寺本三恵子係長は、スタッフの日ごろの健闘ぶりをまず称えました。

「なぜスタッフが仕事に熱心なのかと言えば、自分たちがこの施設を立ち上げてきたのだという大きな自負があるからです」

以前、ここは市営による大小 2 つの屋外プール施設でしたが、震災によって子供用の小さいプールが完全に崩壊してしまい、一般用の大きなプールにも亀裂が入ってしまいました。そこで、子供用の小さいプールを撤去して、B&G 海洋センターとして新たに 25m の屋

内温水プールを建設。従来の大きなプールは亀裂を修復して夏場だけ利用することになりました。

「市営プールだったときは夏場だけ民間会社に委託され、料金を払ってプールで遊ぶという、きわめて単純なシステムで運営されていたので、イベントや水泳教室などはまったくありませんでした。しかし、B&G 海洋センターが併設されるようになってから事業内容が一変し、スタッフによって色々な水泳教室が企画されるようになっていきました」

現在、同海洋センター並びに従来からある芦屋海浜公園プールには、市の正職員 2 名と嘱託職員 4 名が配属され、このほかにも時給契約の水泳指導者 8 名が登録されています。正職員および嘱託職員のいずれもが、B&G 財団のアクアインストラクターキャリアーの資格を持っているため、水泳教室の企画など施設の利用に関しては B&G 財団のさまざまなノウハウが活かされています。

「海洋センターができてから、本当の意味で施設利用の意識が芽生えました。オープン当初は、スタッフ全員が自転車に乗って市内を回り、各戸にチラシを配布して水泳教室を案内したものです。そうした地道な努力で事業を積み上げてきたわけですから、スタッフみんなに自負があるのは当然のことだと思います」

身体障害者も数多く利用

市内には、別の場所に市営プールが 1 つあるほか民間施設も数ヵ所あるため、同海洋センターでは独自性を打ち出す必要がありました。

「私は平成 12 年から赴任したので、海洋センターの立ち上げには参加していませんが、前任者は民間施設と競合しても意味がないという理由から、泳げる人のレベルアップよりも水に慣れ親しむプログラムに力を入れました」

現在、同センターでは、さまざまな年齢層に対応した水泳教室を開催していますが、水に浮かんだ玩具拾いやボール遊びといった、道具を使って水に親しむメニューを数多く取り入れており、泳げない子供も含めて各教室の参加者を一堂に集め、プールでの鬼ごっこを楽しむレクリエーションの日も設けています。

「不思議なことに、鬼ごっこで転んでしまう子供はいますが、泣き出すことはまずありません。周りの楽しい雰囲気に吞まれてしまうようです。また、各教室の活動を見ていると、開講したばかりのときは水を怖がる子供もいますが、そんな場合はコーチが顔色をうかがいながら雰囲気に馴染んだ頃を見計らって、玩具を使いながら一緒にプールに入っていきます。そんな仕事のやり方が保護者から大きな信頼を得ています」



水泳教室の時間。ぞくぞくと子供たちが集まってきます。

教室を欠席した人には、かならず連絡を取り、子供の場合などで保護者から相談があると、担当コーチがすべて対応しながら問題を解決。利用者への対応には特に気を配っているようで、それは施設の管理にも表れています。

「スタッフ全員、『掃除に始まり掃除に終わる』をモットーにしています。体を使う場所なので、清潔が一番。30 分おきにスタッフの誰かが順番で施設内を隈なく見回るようにしていますが、これは安全面の上からも大切です。特に利用者が少ない時間帯は、どこかで誰かが倒れても、他の利用者が気づいてくれる確率が下がってしまいます。水質の管理にも気を配っており、水がきれいだからと言って他の施設から移ってきた利用者もいます」



清掃が行き届き、清潔感漂う館内

利用者への対応という意味では、身体障害者の受け入れについても熱心です。

「海洋センターを設計する段階から、プールの一番近い場所に身体障害者用の更衣室やシャワー、トイレを設けており、スロープもつくられています。そのため身体障害者のみなさんの利用も多く、市内にある NPO の各施設から団体で訪れるケースも出てきています」

同海洋センターでは、身体障害者の利用に際しては介護者 1 名が半額で利用できるように配慮。現在、年間 2,000 名弱の身体障害者がリハビリや健康維持にプールを利用しています。

公的施設ゆえの役割

昨年度、65,484 人という全国の B&G 海洋センターのなかでもトップの年間利用者数を記録し、活発な活動を見せている同海洋センターではありますが、ここにきて大きな悩みを抱えるようになりました。

「芦屋市は財政難に苦しんでおり、赤字施設の扱いが問題化するようになってしまいました。海洋センターも例外ではなく、民間企業への運営委託も話にあがっています。しかし、多くの民間施設のように単にレベルアップをめざすのではなく、幼児でも参加できるような水に慣れ親しむ内容の教室を組んだり、身体障害者の受け入れに力を入れたりしてきたことは、公的施設ゆえの使命を考えてのことなのです。多少の赤字が出ても、弱者の受け入れを忘れてはならないと思います。仮に、民営化された場合、これまで行ってきた公的サービスがどれだけ継承できるのか不安です」

たとえ、公的事业であっても大きな赤字をそのままにしておいて良いという理屈は成り

立ちませんが、住民の税金で補える無理のない範囲の赤字であれば、公的サービスは維持されるべきでしょう。同海洋センターが行ってきた水に慣れ親しむ教室などは、長い目で見れば住民の健康増進に貢献し、地域における医療費の低減にもつながるはずなのですが、それをある時点だけ捉えてコスト的に評価するのは難しいことです。

「近年、1 回だけの利用券より、1 ヶ月間有効の券のほうが売れるようになってきました。これは、継続してプールに通いたいという人が増えてきた証拠だと思うのですが、この現象が住民の健康促進に役立つはずであると、数値化してアピールできないジレンマがあります」

寺本係長はじめスタッフ一同は少しでも赤字を解消しようと努力を続けており、昨年は夏場の利用料金に限り 100 円の値上げを市に申請しました。通常料金は大人 400 円なので、これなら一般的に考えて利用者の負担感は少なく、施設としては夏場の 2 ヶ月だけで 4 ~ 500 万円の利益が見込める計算でした。ところが、公園や施設管理に関する条例によって値上げは認められませんでした。

「昨年は、もどかしさを感じましたが、なんとか施設を運営する側で料金がいじれるように関係者をお願いしており、いまのところ何年か先には実現する見通しができてはいます。今後は、市外在住者の利用も拡大したいと考えており、少しでも経営状態を良くして、従来どおりに公的なサービスを提供していきたいと思います」



屋内温水プールは絶えず水中ウォーキングの利用者が。



震災で残った海浜公園プール。夏場は併用して使われます。

芦屋市内には公的施設、民間施設含めて、半径 5 km のエリアに 5 ヶ所にプールがあるものの、海洋センターと運河を挟んで隣同士になっている他の自治体地域には公営プールがないそうです。

「いまの時代、海洋センターは広域施設として自治体の垣根を越えてどんどん活用すべきです」と、寺本係長。自分たちが立ち上げてきたのだという自負に支えられている限り、芦屋市 B&G 海洋センターの活動は、さらなる向上をめざして発展していくことでしょう。